

令和3年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第3号
(6月の発生予想)

令和3年 6月 1日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】

葉いもち	量：並 程度：少発生 (発病度1~20) 時期：並	① 現在、苗いもちや葉いもちの発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
※【防除上の留意事項】 補植用置苗は早急に除去する。		
ニカメイチュウ 第1世代	量：並 程度：少発生 (被害株率1~29%) 時期：並	① 越冬前の刈株の被害発生量は平年比やや少ない(-)が、中越、魚沼は平年比多い(+) ② 越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺は平坦部で5月第3半旬頃から始まり、発生時期、発生量とも平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
ツマグロヨコバイ	量：並 (佐渡は多い) 程度：少発生	① 4月下旬~5月上旬の越冬虫のすくい取り調査の確認虫数は平年並(±)だが、佐渡は平年比多い(+) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
イネドロオイムシ	量：やや多い 時期：やや早い (幼虫ふ化盛期平坦部 6月第2半旬頃)	① 5月下旬の成虫寄生数は平年比やや多い。(+) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
イネミズゾウムシ	量：並 時期：やや早い (成虫水田侵入盛期 6月第1半旬)	① 5月下旬の成虫寄生数は平年並(±)で、被害度は平年比やや少ない。(-) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)

【大豆】

ネキリムシ類	量：やや少ない 時期：並	① 5月第5半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はタマナヤガが平年並、カブラヤガは平年比少ない。(±~-) ② 発生時期は、フェロモントラップにおける誘殺消長から平年並と推定される。
--------	-----------------	---

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】

黒斑病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 5月下旬の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
黒星病	量：多い 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 5月下旬の発生量は平年比多く、果実への感染も認められている。(＋) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の注意事項】</p> <p>① 効果的に防除するためには二次伝染源の除去が重要であり、発病した葉、果実は見つけ次第除去して土中深く埋める等、適切に処分する。</p> <p>② 防除効果を高めるため、薬剤散布は発病部位を除去した後に行う。</p> <p>③ 耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>		
セイヨウナシ 褐色斑点病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 5月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の注意事項】</p> <p>① 発病した葉、果実、枝は剪除し、土中深く埋める等適切に処分する。</p> <p>② 例年6月下旬頃から発病葉が急増するので、防除間隔が開きすぎないように注意するとともに、天気予報に留意し、降雨前散布を徹底する。</p> <p>③ 果実感染を抑制するため、袋かけは遅くとも6月5日までに実施する。</p>		
ナシヒメシンクイ	量：並 程度：少発生 時期：並 (第1世代成虫の発蛾盛期は6月第4半旬頃)	① 5月下旬現在、越冬世代成虫のフェロモントラップでの累積誘殺数は平年比やや少ない。(－) ② 第1世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫の誘殺盛期から平年並と推察される。 ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の注意事項】</p> <p>第2世代幼虫の防除時期は、第1世代成虫誘殺盛期の7～9日後である。</p>		
ハマキムシ類	量：並 程度：少発生 (被害葉率1～15%) 時期：やや早い (越冬世代成虫の発蛾盛期は5月第5半旬以降)	① 5月下旬の被害葉の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の注意事項】</p> <p>第1世代幼虫の防除時期は、越冬世代成虫誘殺盛期の概ね20日後である。</p>		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】つづき

<p>アブラムシ類</p>	<p>量：並～やや少ない 程度：少発生 (寄生葉率1～5%)</p>	<p>① 5月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 新梢先端部位をよく観察し発生を確認したら早期に防除を行う。 ② ワタアブラムシは薬剤抵抗性が発達しやすいので、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		
<p>ハダニ類</p>	<p>量：並～やや多い 程度：少発生 (寄生葉率1～5%)</p>	<p>① 5月下旬の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① ハダニ類は発生が多くなると防除が困難となるため、園内をよく観察し、発生初期に防除を行う。 ② ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		
<p>ニセナシサビダニ</p>	<p>量：並～やや多い 程度：少発生 (被害葉率1～5%)</p>	<p>① 5月下旬の発生量(葉の被害)は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 越冬する第2雌が出現する6月中～下旬に防除を行い、越冬量を減らす。 ② 若い葉を好んで加害するため、徒長枝の先端部まで薬剤が十分かかるよう留意する。また、園地周縁部などの薬液のかかりにくい場所は補正散布を行う。</p>		
<p>果樹カメムシ類</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害果率1～2%) 時期：やや早い</p>	<p>① 5月下旬の被害果の発生は未確認で平年並。(±) ② 越冬世代成虫の予察灯での誘殺は5月第3半旬から認められ、飛来時期は平年並。(±) ③ 5月下旬現在の予察灯での誘殺数は平年並。(±) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>防除上の留意事項】 ① 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり、園地へも飛来が増加するので注意する。園地内でカメムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に防除を行う。 ② カメムシ類は局地的に飛来し、集中的に加害する傾向がある。山林や雑木に隣接する園地や過去に被害を受けた園地では特に注意する。 ③ 果実への袋かけはカメムシ対策として有効であるため、作業が遅れないように実施する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【もも】

せん孔細菌病	量：やや少ない～並 程度：並 (発病葉率1～10%)	① 伝染源となる発病枝(春型枝病斑)の確認地点率は低く、少発生園地のみ認められた。(－) ② 5月下旬の発生量(発病葉)は、平年並。(±) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 罹病枝(春型枝病斑)は周辺の発病葉とともにせん除し、ほ場外に搬出し処分する。</p> <p>② 果実感染を抑制するため、早期の袋かけに努める。</p> <p>③ 防風ネットの設置・補修等防風対策を実施する。</p> <p>④ 耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>		
灰星病	量：並 程度：並 (発病果率1～5%)	① 5月下旬の発生量(発病果)は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
モモハモグリガ	量：やや少ない 程度：やや少ない (被害葉率1～15%) 時期：並 (第1世代成虫の発蛾盛期は5月第6～6月第1半旬)	① 5月下旬の発生量(被害葉)は未確認で平年比やや少ない。(－) ② 第1世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫の誘殺から平年並と推察される。 ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 第2世代幼虫の防除時期は、第1世代成虫の誘殺盛期の約10日後である。</p> <p>② 7月以降は世代が入り混じって防除効果があがらない場合が多いので、第2世代幼虫の防除を徹底する。</p>		
ナシヒメシンクイ	量：並 程度：並 時期：並 (第1世代成虫の発蛾盛期は6月第4半旬頃)	① 5月下旬の新梢被害枝の発生は未確認で平年並。(±) ② 5月下旬現在、越冬世代成虫のフェロモントラップの誘殺数は平年並。(±) ③ 第1世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫の誘殺盛期から、平年並と推察される。 ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 第2世代幼虫の防除時期は、第1世代成虫の誘殺盛期の7～9日後である。</p> <p>② 心折れを見つけた場合は、直ちにその部位を剪除し、虫の密度を低くする。</p> <p>③ 新梢伸長期は心折れの発生防止に重点をおいて、定期的に薬剤防除を行う。</p>		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【もも】つづき

<p>果樹カメムシ類</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害果率1~2%) 時期：やや早い</p>	<p>① 5月下旬の被害果の発生は未確認で平年並。(±) ② 越冬世代成虫の予察灯での誘殺は5月第3半旬から認められ、飛来時期は平年並。(±) ③ 5月下旬現在の予察灯での誘殺数は平年並。(±) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【防除上の留意事項】 「なし」の項を参照する。</p>		

【ぶどう】

<p>灰色かび病</p>	<p>量：やや多い 程度：少発生 (発病果房率1~10%)</p>	<p>① 5月下旬の発生量(発病果房)は平年比多い。(＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 発病した花穂や果粒、葉は早めに取り除き処分する。 重点防除時期は6月中旬頃までである。ただし、耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連続使用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		
<p>フタテンヒメヨコバイ</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害葉率1~25%)</p>	<p>① 5月下旬の発生(被害葉)は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高い(＋)と予想されている。</p>

【かき】

<p>円星落葉病</p>	<p>感染量：並 感染時期：やや早い (孢子飛散盛期は6月第1半旬)</p>	<p>① 前年の発生量は平年並、越冬伝染源量も平年並と推察される。(±) ② 孢子飛散盛期は6月第1半旬頃で平年比やや早いと予想される。(＋) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>カキクダアザミウマ</p>	<p>量：多い</p>	<p>① 前年の発生量は平年比多い。(＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>ハマキムシ類</p>	<p>量：多い</p>	<p>① 5月第1半旬~第5半旬までのフェロモントラップ累積誘殺数は、チャハマキでは平年並~多く(±~＋)、チャノコカクモンハマキは平年よりやや多い(＋)。 ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【かき】 つづき

フジコナカイガラムシ	量：少ない 時期：並 (第1世代幼虫ふ化盛期：6月第4半旬頃)	① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬幼虫量も平年より少ないと推察される。(－) ② フェロモントラップによる越冬世代成虫の誘殺盛期と有効積算温度から推定される第1世代幼虫の発生時期は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 越冬世代成虫の誘殺盛期を起点に有効積算温度で推定される第1世代幼虫の防除時期は、6月中～下旬である。</p> <p>② 越冬世代成虫の産卵時期に幅があり、第1世代幼虫のふ化期間は長引きやすいので、例年被害が多い園地では10日程度の間隔で複数回防除する。</p> <p>③ 今後の気象経過によっては、幼虫ふ化盛期が早まる可能性があるので注意する。</p>		

【冬春トマト（施設）】

灰色かび病	量：やや多い 程度：少発生 (果実発病度1～20%)	① 5月下旬の発生は、葉の発病は平年比やや多く、果実での発病もみられた。(＋) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
葉かび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病度1～20%)	① 5月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
アザミウマ類	量：並 程度：少発生 (寄生花率1～10%)	① 5月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
コナジラミ類	量：やや多い 程度：少発生 (寄生株率1～25%)	① 5月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【すいか】

つる枯病	量：やや少ない 程度：少発生	① 5月下旬の発生量は平年比少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
炭疽病	量：やや少ない 程度：少発生	① 5月下旬の発生量は平年比少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【すいか】 つづき

<p>アブラムシ類</p>	<p>量：並 程度：少発生</p>	<p>① 5月下旬の被害発生は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>オオタバコガ</p>	<p>量：並 程度：少発生</p>	<p>① 5月下旬の被害発生は平年比少ない。(－) ② フェロモントラップ総誘殺数は平年並～やや少ない。(±～－) ③ 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>

【秋冬ねぎ】

<p>べと病</p>	<p>量：並 程度：少発生 (発病株率1～10%)</p>	<p>① 夏ねぎでの5月下旬の発生は未確認で近年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>さび病</p>	<p>量：並～やや少ない 程度：少発生 (発病度1～5)</p>	<p>① 夏ねぎでの5月下旬の発生は未確認で近年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>ネギハモグリバエ</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害度1～10) 時期：並</p>	<p>① 夏ねぎでの5月下旬の発生は未確認で近年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>ネギアザミウマ</p>	<p>量：やや多い 程度：中発生 (被害度11～20) 時期：やや早い</p>	<p>① 夏ねぎで5月下旬に被害(少発生)が確認された。(＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>

【ユリ(球根養成)】

<p>葉枯病</p>	<p>量：並</p>	<p>① 5月下旬の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>アブラムシ類</p>	<p>量：並</p>	<p>① 5月下旬の発生は、ハウス作型で稀に認められる程度で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【その他】

<p>【アブラナ科野菜】 コナガ</p>	<p>量：やや多い～多い</p>	<p>① フェロモントラップ誘殺数は平年並～平年比多い。 (±～+) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は ほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【野菜・花き全般】 オオタバコガ</p>	<p>量：並</p>	<p>① すいかの項を参照。 ※【防除上の留意事項】 ほ場をよく見回って発生状況を確認し、幼虫の発生が認められたら、作物に食入する前に防除対策を講じる。</p>

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多
いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。
②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発
生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。
注2：「予報の根拠」の、(+)は発生量を増加させる要因、(-)は発生量を減少させる要因、
(±)はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使
きましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺
の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしま
しょう。

新潟県病害虫防除所業務課
電 話：0258-35-0867
F A X：0258-35-7445
<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

【参考】北陸地方 1か月予報（5月29日から6月28日までの天候見通し）

（新潟地方气象台：令和3年5月27日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20	30	50
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	40	30

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（5月29日～6月 4日）	20	40	40
2週目（6月 5日～6月11日）	20	40	40
3～4週目（6月12日～6月25日）	20	40	40